

YOUTH TENNIS

STRUGGLING WITH STRUGGLING

<子供のテニス/困難との対峙>

メレディス・ポラック

テニス関連のウェブサイトを開くと、子どもたちが満面の笑顔でテニスを楽しみ幸せいっぱいといった写真だらけですね。子どもたちにテニスを教える場合の多くはこんな具合です。しかし、指導に伴う裏側の写真を載せることはありません。普通は、若い子どもたちにテニスを教えていて、覚えたての技術を使ってネットを超えたときなどにみる、何かを成し遂げたときの彼らの喜びを見るときほど、やりがいを感じることはありません。でも、ありがちな失敗をただで、完全に自棄的になってしまう子供を見る場面もあります。こういった状態に陥りやすい子どもたちには、完璧でありたいと思う傾向があるようです。そして、多くの場合、とても小さい頃からこういった特徴に凝り固まっているようです。

ある時レッドコートに20個のコーンを立てて「コーン当て」のゲームをした時のことです。的がかなりたくさんあり、かなりの確率で的に当たるので、子どもたちは楽しんで行うゲームです。子どもたちには、コーンの立っている半分を狙って打つ練習なので、コーンに当たらなくてもその方向に打てていけばいいんだと説明をしました。

ある小さな男の子が、コーンを並べ終わって、ニコニコとしながら意気揚々と列に並びました。私は彼にボールを出してあげ、彼は完璧にフォアハンドを打ち、ボールはネットを超えてコーンから15センチほどのところに弾みました。

私は「すごい！ちゃんとデュースコートに打てたね！」と褒めてあげましたが、その言葉が終わらないうちに、彼は唇を震わせて、うなだれてしまったのです。

私は「良かったじゃない！フォアハンドの打ち方もすごく良かったよ！」と言いましたが、この6歳の男の子は、ラケットを落として蹴飛ばし、「コーンに当たらなかったんだ。僕は下手くそなんだ。」と言いました。

私はすぐに彼のそばに行き、彼のラケットを拾い上げ、彼に渡して、私の方を見るように言いました。そして、今はどんな練習をしていたのか訪ねたところ、彼は、反対側のコートに半分を狙って打つ練習だということは知っていました。そこで、コーンを狙って打つ練習だったのか、コーンに当たれば楽しいからというだけのことだったのかを聞くと、彼はあとの方だと言いました。

そこで、「もう一回素晴らしいフォアハンドを打って見せてくれる？」と聞いたところ、彼は肩をすくめながらラケットを手に取りました。そして売ったボールは正しい方向に飛び、コーンをかすりましたが倒すには至りませんでした。彼は、金切り声を上げてラケットを叩きつけて泣き出してしまいました。私は言うまでもなく、さっきと同じように「良かったじゃない！」と言い、素早くコーンを片付けて、次の練習に移りました。

レッスンを終わってから、この男の子の指導をしてきたコーチとレッスンでの出来事について話し合いました。彼女が言うには、彼は極端に自分に厳しく、失敗をしたことを許すことができない性格なので、的を使ったり、目標の数を決めたりという、定量的な要素のないドリルを好むとのことでした。たった6歳の子供なんですけど、彼の完璧をを求める性格が、学習の機会を妨げ、単純に練習を楽しむことができなくなってしまっていたのです。

学校の教師としての視点からすると、小児心理学の基本原則は、子供が学習をして成長するためには、ちょっとした葛藤を経験することが必要だということを知っています。教師やコーチは、ポジティブな経験で収穫が得られるように、指導内容を組み立てて導くことができますが、収穫を得るためには、子ども自身がトライして、そして、失敗して、またトライすることの繰り返しが必要なのです。

ネットやバックアウトやサイドアウトを経験しないで、機能的なスイングを学ぶことができるでしょうか。プレーヤーは、どんなエラーをしたのか、なぜエラーが起きたのかを判断して、調整をして、次の試みで違う結果を導き出すのです。弓の射手は、的の真ん中に毎回当てますか。バスケットボールのフリースローは、いつもリングに当たらずにネットを抜けますか。フットボールのキッカーは、タッチダウンのあとのキックを失敗することはありませんか。必ず失敗はあるものです。ですから、6歳の子供が100%の安定性と正確さでフォアハンドを打てるなんて思うことが間違いなのです。私は、他の子供で同じようなことが起きる経験をするまでは、この子はただ疲れていただけなんだろうと思っていました。

ある日、あるコーチが教えている8歳の女子のオレンジボールのグループのレッスンを代わったときのことで。バックハンドの練習をしていて、彼女たちの打ったボールが私の届く範囲だったら、それを打ち返すからもう一本バックハンドを打って、もし、届かないボールだったら、別のボールを出すのでそれを打ち返すようにということで練習を始めました。簡単な練習が続き、それまではきれいに下から上に振り抜いてボールにも緩やかなトップスピンをかけて打っていた女の子が、初めて一球目をネットに掛けたときのことでした。彼女は、ラケットをコートに投げつけて、泣きじゃくり始めたのです。

私は「大丈夫だよ、もう一球打てるんだよ！」と声をかけましたが、彼女は急に向き直り「打ちたくない！」と言ってミスをした場所に立ち続けたのです。

私は「もし2球目を打ちたくないだったら、次の子が打てるようにそこをどいてくれる？」と頼みました。

ここからが面白いところです。彼女は、ふくれっ面を続けられないという私の提案にビックリした顔をして、ラケットを掴み足を踏み鳴らしてコート外に出ました。

私は、他の子供達と練習を続けながらも、もしやりたければ列に戻るようと数回促しましたが、4回ほど列が回ったところで、彼女は「私は頭にきた！」と叫んだのです。

私は他の子供達との練習を続けながら「もし怒っていてプレーができないだったら、ちょっと

“Youth Tennis/Struggling with Struggling”

- M.Pollack

TennisPro; May/June, 2017

ベンチに座っていたらどう？飲み物を飲んでもいいのよ。」と言い、他の子供達の練習を続けながらも彼女の様子をうかがっていました。彼女はまた足を踏み鳴らしながらベンチまで行って、座って大声で泣き始めたのです。周囲のコートの子どもたちの迷惑になるほどの泣き声だったのですが、1分ほど放っておいてから子どもたちにボールを拾わせて、その間にその子のところに行きました。

「なんでそんなに怒っているの？」と聞くと、「傷ついたの。失敗をした上に、コーチから他の子に順番を譲るようにと言われて・・・」との答え。

「あなたに2球目を打ったらときいたのに、あなたは打たなかったわよね？あなたがコートの中真ん中に怒って立ったままでいたら、他の子達が練習できないじゃない？もし、誰かが前に立っていて、あなたが練習できなかったとしたらどう思う？どうしたい？」と訪ねましたが、彼女は答えられませんでした。ついに口を開いて出てきた言葉が「コーチは、私がベンチで泣いていたときに、練習を止めて話に来てくれなかったじゃない。」でした。

私は彼女に、他の子達は練習したくて来ているのだということを話し、「今こうしてあなたと話しているけれど、そろそろボールを集め終わりそうだから、また練習に戻るわよ。ここであなたが私を求めているからというだけで、他の子達を放っておくことはできないから。もし、あなたが怪我をしたり、病気になったのだとしたら、練習を止めてでもそばにいるけれど、今のあなたは怪我でも病気でもなく、ただ何かに腹を立てているだけでしょう？」と言いました。

彼女はラケットを蹴り飛ばしました。

「あなたは、バックハンドを失敗したことで怒っているの？」と聞くと、頷きました。

私は「私だって、バックハンドやフォアハンドやボレーやサーブをしょっちゅう失敗しているのよ。そんなときは自分が腹立たしくなるけれど、次のショットに備えなければならないから、頭にきている暇なんかないの。また、失敗を繰り返さないように、素早く失敗の原因に気がつかなければならないの。簡単なことではないけれど、テニスも簡単なことではないわ。だから、こうして練習をしているのよ。失敗をしても問題ないのよ。それも勉強のうちだし、プレーにはつきものなんだから。」

残念ながら、私の言葉は彼女には届かなかったようでした。5分ほどして、みんなでポイントゲームをしているときに彼女がボレーをミスしました。彼女は唸り声を上げ、足を踏み鳴らし、ラケットを叩きつけ、サイドのカーテンに向かって投げつけ、腕組みをして真っ赤な顔で私を睨みつけました。私は、ラケットを投げるのは危険なことだし、ちょっと休むように言いました。彼女がベンチに向かってズカズカと歩き、ベンチのそばで立ち止まったところ、一人の子が彼女のラケットを拾って彼女に渡そうとしました。でも彼女は腕組みをしたまま後ろを向いてしまいました。そこで、その子は、そのラケットをそっとベンチに置いたのです。

私は、練習を続けながら、ゆっくりと50数え終わったら練習に戻るように彼女に伝えました。戻ってきた彼女はすぐにポイントを決め、満面の笑みを浮かべたのです。そしてまたポイントを取っ

**“Youth Tennis/Struggling with Struggling”
- M.Pollack**

たのです(実は、私がそうできるようにしたのですが…)。彼女の喜びようたらずありませんでした。その後、ポイントを取られた時に、一瞬彼女の目つきが変わりました。彼女がキレる直前に、「あなたが決めたときに友だちが言ってくれたように、ナイスショットと言うんだよ！」と言ったところ、彼女はきっぱりと「ナイスショット」と言いました。

そして、すぐに練習に戻りました。彼女が、自分がクラスの一人であり、良いショットも悪いショットも受け入れる必要があるということがちょっとわかったかなという瞬間でした。レッスンのまとめが終わり、殆どの子がコートから走って出ていく中で、一人の子がやってきて「コーチ、ありがとう。」と言ったのです。私は「何が？」と聞き返しました。

彼女は、「いつもはあの子が怒ると、コーチは練習を止めてしまって、自分たちだけで打つことが当たり前だったんです。でも、今日、コーチは、あの子が泣いていても私達の練習を続けてくれました。私はとても楽しかったです！」と言ったのです。

その時のレッスンは全くやりやすかったわけではありませんでした、一人の子供の完璧主義や甘えによって、レッスンがめっちゃくちゃにならなかったことは良かったと思いました。

子どもたちに困難と対峙させ、難しい局面に彼らを晒し、彼らにそこから何かを学び取らせ、正しい対処法を身につける事ができるようすることが大切なのです。自分からやる気が芽生えたプレーヤーは、頑張り続けて壁を乗り越えます。そして、時には次の壁を待ち望むようになります。私が子供の頃、水泳のレッスンを受けていました。そのこのプールには、何段かの高さの違う飛び込み板や台がありました。まず、普通の飛び込み板から飛び込むことを教えられました。怖かったですが、やりました。そして、段々と高さが増していきました。(一番高いところはやりませんでした。)ちょうどビデオゲームの展開のように、高さが増すたびに、難しくなってきました。何か難しいものを得るには自分はいまうまくなければと考えるワクワク感が必要でしょうね。

テニスコーチとしても学校の教師としても、明らかに楽しめていない子供を見るといつも心が痛みます。そういった子たちは、物事を黒か白かだけのものの見方をしているようです。できるかできないかだけしかないのです。これは、年齢が上がってもつきまってくる状況で、そういった場合、私はなんとかして彼らの気持ちの持ち方の調整をすることを試みます。こういった状況を放置している時間が長ければ長いほど、対応は信じられないくらいに難しく時間がかかります。子どもたちの周りの家族・地域社会・仲間みんなが、本当の学習や生き方の良い例を示して引き出してあげる必要があるでしょう。

それでも、子どもたちのテニス指導には、問題に突き当たったときに対応しきれない子どもたちとの関わりがつきものです。コート上でこういった難しい場面は、指導者にとって、どうやって自分の気持ちをコントロールさせ、状況を受け入れさせ、コート内外でのポジティブな結果につなげていく対応の仕方を覚えさせる指導ができるかの格好の機会といえます。全員が笑顔でいる状況でのレッスンをするのは楽しいことですが、そうなるには、コーチもプレーヤーも身体的にも精神的にも感情的にも色々なスキルを学んで成長することが求められます。指導が難しいを場面に直面した時に、困難にどのように対峙してきたかが生きてきます。

【筆者紹介】 Meredith Pollack (メレディス・ポラック): PTRのインストラクターでUSPTAのプロフェッショナルであり、イリノイ州のNaperville Tennis ClubとNaperville Park Districtで初心者からプレーヤーまでの指導を経験する。パブリックスクールで6年間英語の教鞭をとりながら、大学のテニスチームのヘッドコーチを務め、Athletic Leadership Councilの活動を取り仕切った。教育者としての経験を活かした教育学のシステムとPTR, USPTA, USTAで学んだことを用いて生徒の動機づけを行ってきた。初心者からレベル2までの大会のトーナメントディレクターとして17年の経験を持つ。所属したテニスクラブの慈善プログラムを企画し、クラブの多くのトラベルチームへのコート内外でのサポートを行っている。テニスとプレーヤーへの関わりをもとに、チームの持つ力、子どもたちへの指導、プレーヤーの維持、健全な競技法、バランスの取れたトレーニングなどについて、プレーヤーやコーチや施設管理責任者への教育とサポートのために執筆をしている。

【翻訳・監修】 鈴木真一